秘儀

相応しからぬ者とて
月は我に語らず

都は人々を嫌(たの)しまするに余りある程なるが故に・・・

我、かつて月を忘れたり
埃にまみれたる扇を今し拡げれど
おぼろ雲さえ招き寄せることかなわず
まして
眠りは既に眠りの為にあらず
ただ明日への義務となり果てり
既にして血は淀み
むしろ流れ出んことを希うものなり
その時こそ
赤く月は染まり
我に語り出すであろう
かの跳躍に満ち満ちた言葉により
静のうちにある動を
動のうちにある静を

(1991.6.10)